

令和7年度第3学期始業式式辞

おはようございます。明けましておめでとうございます。

穎明館生の皆さん、2026年、令和8年のスタートです。「1年の計は元旦にあり」、また、第3学期始業式という「節目」を大切にして、新たな気持ちで前進していきましょう。

6年生、39期生の皆さん、共通テストが近づいてきました。39期生さんの頑張りは、後輩の生徒たち、私たち教職員に勇気を与えてくれます。「切に思ふことは必ず遂ぐるなり」。最後まで強い気持ちで挑戦してください。挑戦し続ける皆さんを見守り、応援しています。

ところで、皆さんは作家の重松清さんを知っていますか。人気作品を挙げるなら、『ビタミンF』、『小学五年生』、『青い鳥』、『カレーライス』、『くちぶえ番長』、『とんび』、『流星ワゴン』、『きみの友だち』等………忘れていても中学入試問題や受験勉強で文章に触れなかつた人は、おそらくいないのではないかと思います。私にとっては早稲田大学の同窓、同世代、同じ時期にキャンパスを歩いていたこともあり、注目をしてきた、好きな作家の一人です。今回、10年間、客員教授を務めた早稲田を任期満了で退職するにあたり、いわゆる「最終講義」が行われたので出席、受講してきました。90分の前半は大学生の質問に答える形式、後半は「それでも僕らは言葉でつながっている」という講義でした。私の中では色あせない、鮮明な記憶です。まずは前半の質疑応答を紹介させて下さい。

- なぜ早稲田で先生になったのですか？

早稲田大学からのお話を受けた形だ。先生になることは子どもの頃の将来の夢だった。教員免許はとったが、吃音のこともあり、ならなかつた、なれなかつた。小説家は定年後の夢だった。

- どうして10年続けたのですか？

3年の任期だったが、面白かった。ゼミももたせてもらった。5年で一区切りと思ったが、新型コロナで学生の不安に向き合い、学生の頑張りに触れ、もっと伝えたい、交わりたいと思うようになった。2020年からは先生に軸足をおいていた。

- 重松先生の一番の思い出は何ですか？

「思い出は習慣の中に残っている」………例えば「出席カード」という言葉は、もう口にすることはないだろう。ただたださびしいね。

- 印象に残った学生はいますか？

『舞姫通信』という作品で、「思い出せない君たちのことを忘れはしない」と書いた。学生に書かせた作品を読み返すと、顔が思い浮かぶね。

- ・ 教師と作家の両立はできましたか？
教師に重きを置いた後半はとくにできなかった。出版社に申し訳ない。
- ・ 大切にしている言葉は何ですか？
座右の銘などはない。ただいま、おかげが大好き。ありがとう、ごめんなさい、を発するシチュエーション、相手がいることが幸せ。どうでもいい一言はどうでもよくない。
- ・ 言葉の選び方で工夫していることは何かありますか？
小学生から読める言葉しか使っていない。短めのセンテンスにも気を使っている。それでも言葉は思いを超えていけない。思いと言葉の誤差が少ないか、わかっているのが作家、詩人。自分の棺桶に入れる一冊は『きよしこ』(吃音はしんどいんだ)。スマーズなのがいいとは思わない。うめきからしゃべれることに重きを置きたい。先生になるのをあきらめたのはしゃべれないから……『青い鳥』では自分の理想とする先生を書いた。「大切なことは伝わるはずだ」と。
- ・ うまく伝えられない後悔などはありますか？
完成したものをよく直す。気の利いた言葉はそうそう湧いてこない。必死に言葉を探している。
- ・ なぜ物語を書くのですか？
たくさんの出会ってきた人たち、その人たちとの関わりを書きたくてやってきた。どこかにいる誰かに伝えたい………その思いです。
- ・ 中学受験に使われることについて、どう思いますか？
日本の国語教育にもれなくついてくる宿命………嫌でも付き合ってください。ある進学校の入試問題で、「その時のお父さんの気持ちを書け」という設問があった。父親の気持ちがよくわかる子、俺は嫌だな。だから「よくわからない」という答えも正解にしてあげたい。
- ・ 歳をとること、命について、どう考えていますか？
『その日のまえに』……近づいているのかな。この10年間で7回入院した。実は先週、退院したばかりだ。講義前は若さに立ち向かうためにテンションを上げてから教室に入っている。
- ・ 学生時代にやっておくべきことをアドバイスしてください。
たくさん失敗してください。落ち込みから立ち直ることこそしてほしい。転び方と起き方を覚えておけ。60歳過ぎて転ぶとつらいぞ。筋肉痛と一緒に3日後にくる。

どうでしょうか。伝わるかな。私には、重松先生の学生への愛情、先生という仕事、先生をしている人たちへの敬意が強く伝わってきました。まったくピンとこない人たちには、新年早々ごめんさない。ただ、自分の好きな作家、作品、あるいは作家や作品でなくてもいい。自分の好きなものを堂々と語れる人であってほしい、と思うのです。皆さんはどうですか。こんな風に少し興奮気味にでも、熱くなっているもの、語れるものはありますか。もし、ないのならば今年の目標の一つに、「自分の好きを見つける、語れるまでにのめりこむ」を掲げるはどうでしょう。

もう一つ、「優しい人になりたいな、優しい人になってほしいな」と思います。重松先生は「優しさ」を考えるとき、親切とか寛大とかに置き換えられない「優しさ」を書きたいと話されました。「小説では、先生と教え子、夫婦など、人ととの距離を描いてきた。離れているからこそ生まれる関係、深い優しさもあるのではないか」と。人が人を憂うる、優しい人になりたい。皆さんにもなってほしい。友だち、他者との距離を考えられる人に成長してほしいと思います。あえて離れて尊重すべき距離、詰めていく距離、それを埋めていくのが言葉です。言葉を大切にしてください。

それでは最後に、重松清先生の『きよしこ』の一節を紹介します。

「誰かになにかを伝えたいときは、そのひとに抱きついてから話せばいいんだ。抱きつくのが恥ずかしかったら、手をつなぐだけでもいいから」

固く閉じたわけではないのに、瞼はぴたりとくっついて、もう持ち上がりそうになかった。

「抱きついて話せるときもあれば、話せないときもあると思うけど、でも、抱きついたり手をつないだりしてれば、伝えることはできるんだ。それが、君のほんとうに伝えたいことだったら……伝わるよ、きっと」

少年はうなずいた。それ待っていたように、また宙に浮く感覚に包まれた。

「君はだめになんかなっていない。ひとりぼっちじゃない。ひとりぼっちのひとなんて、世の中には誰もいない。抱きつきたい相手や手をつなぎたい相手はどこかに必ずいるし、抱きしめてくれるひとや手をつなぎ返してくれるひとも、この世界のどこかに、絶対にいるんだ」

きよしこは最後に「それを忘れないで」と言った。

吃音に悩み、苦しんできた重松先生ならではの言葉、メッセージです。皆さんの中にも、なかなか他人には言えないコンプレックスを抱えている人もいるかもしれない。

丈夫です。重松先生の言う通り、「君はだめになんかなっていない。ひとりぼっちじゃない。ひとりぼっちのひとなんて、世の中には誰もいない。抱きつきたい相手や手をつなぎたい相手はどこかに必ずいるし、抱きしめてくれるひとや手をつなぎ返してくれるひとも、この世界のどこかに、絶対にいるんだ」——あなたを理解してくれる人は必ずいます。

今日は、私の好きな重松清先生の早稲田大学での最終講義から、私が受け取ってあなたがたに伝えたいことを話しました。穎明館の1時間、1時間の授業にも、先生方からの熱いメッセージは込められています。「今年も授業を大切に」——お互いに充実した1年にしていきましょう。

以上、令和7年度第3学期始業式式辞といたします。